

51 節に「**わたしが与えるパンとは、世を生きかすためのわたしの肉のことである**」

（【TEV】では、The bread that I will give you is my flesh と未来形になっている。「わたしが与えるであろうパン」）という言葉がある。

これまでは私たちを生きかす「**まことのパン**」のことが語られていたが、ここでそれが「**肉**」という言葉に変わっている。そしてこの後のところでは、今度は主イエスの「**肉を食べ**」、「**血を飲む**」という話になっていく。これは明らかに、「**聖餐**」を意識してのことである。（参照、ルカ 22:19）「**これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である**」）

「**聖餐**」は、「**天から降って来た生きたパンである主イエス**」を食べて私たちが生きかされるために主が備えて下さった食卓である。洗礼を受け、聖餐に与っている人々は、主イエスの十字架と復活による罪の赦しと永遠の命が自分に既に与えられており、新しい命を生き始めていることを確信することができる。

今日の箇所では6章の一連の話の一つの決着を迎える。主イエスが五つのパンを取り、感謝の祈りを唱えて、男だけでも5000人もいた大群衆のすべてに分け与え、残ったパンくずを集めると十二籠になったという不思議な出来事が、一体何を指し示した徴なのか、そのことが今日の箇所ではっきりする。

そして、そのことがはっきりすると、それまで主イエスを王様にしようとして群がっていた人々はもちろん、それまでは主イエスの弟子として従っていた人々も、「**実にひどい話だ**」と言いながら主イエスの許を去っていく(60 節)。

ここに出てくる「**弟子たち**」とは、恐らくこの福音書が書かれた当時、ヨハネの教会に属していたキリスト者たちの姿の投影だと思われる。

52 節. 「**それで、ユダヤ人たちは、『どうして、この人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか』と、互いに激しく議論し始めた。』**」

この場合の「**ユダヤ人**」は、必ずしも民族としてのユダヤ人に限定されるべきではなく、51 節に出てくる「**世**」と同じで、主イエスによって「**永遠の命**」が提供されているのに、どう受け取ったらよいか分からず、むしろ「**実にひどい話だ**」とか「荒唐無稽な話だ。そんなこと誰が信じられようか」と鼻でせせら笑いながら主イエスを馬鹿にし、罵倒し、無視する私たち人間（罪人）の代表者である。ただ、58 節との関連で言えば、第一義的にモーセ時代からユダヤ人である。

「**人の肉を食べる**」とか、「**人の血を飲む**」という言葉は、普通に聞くとギョッとする言葉であるが、これは文字通りに理解すべきではなく、一つの文学的表現と理解した方がよい。その上で、聖書において「**人の肉を食べる**」と言った場合、それはある人を憎んで殺すということを意味する。詩編 27 編にはこういう言葉がある。

**「さいなむ者が迫り、わたしの肉を食い尽くそうとするが、わたしを苦しめるその敵こそ、かえって、よろめき倒れるであろう。」**

「肉を食う」とは、こういう敵意や憎しみで人を殺すことを表す。

また、「血を飲む」ということは、ユダヤ人には、動物の血ですら厳しく禁じられている。ユダヤ人は、動物を食べるときも、血を全部抜いて、パサパサの肉を食べる。「血」は「命」であって、それは神に属するものだからである。これに関して、レビ記 17 章 10 節以下を参照してほしい。

主イエスが「**わたしが与えるパンとは、世を生きるためのわたしの肉のことである**」と言われるとき、また「**はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない**」(53 節)おっしゃるとき、そこに主イエスの十字架の死が暗示されていることは、今挙げた詩編やレビ記の言葉からも分かる。

この十字架で捧げられた肉と血こそが、罪の世を新たに生かす肉であり、この肉を食べることが新しい命を与えられて、永遠に生きることに繋がる。人間に残されたことは、その恵みの事実を信じるか否かだけ。信じる者は、人の子の肉を食べ、その血を飲むことによって生きる。人はその「**信仰**」と「**食べる**」、「**飲む**」ことによって命を与えられ、生きる。その命は肉体の命ではなく霊の命であるが故に「**永遠の命**」である。

人が主イエスの十字架の死と復活は我が救いのためであったと心に信じ、口で告白をする時、教会では洗礼式を執行する。その洗礼式において受洗志願者に誓約をしてもらうが、その中に、「**あなたは今後、主の聖餐を重んじて誠実にこれに与かる**」ことを約束するかという言葉がある。信仰を告白して洗礼を受けるということは、礼拝において聖餐に与かる。聖餐を受けることだということ。キリスト者は誰でもこの誓約をして洗礼を授けられ、キリスト者になったはず。つまり、キリスト者の命にとって無くてならぬものが聖餐である。十字架上で裂かれた主イエスの肉、流された主イエスの血、主イエスの愛、主イエスの命を感謝をもって頂く。そのことをしなければ、キリスト者の命は生きないのである。

54 節. 「**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。**」

「**わたしの内におり**」とは、霊において主イエスに包まれている、と言える。このことをもう少し具体的に考えると、57 節で主イエスは、「**生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる**」と言われている。

ここでは「**生きる**」という言葉が、ここでも強調されていることは明らかである。父なる神が生きておられる。その生きておられる父が主イエスをお遣わしになっているから主イエスも生きている。その主イエスが生きているという現実、それは肉をもってこの地上

に生きておられた時の現実だけではなく、十字架の死と復活を経た後の現実であり、それは今の教会（主日礼拝）における現実である。いつの時代、いつの時においても、主イエスは、聖書の言葉を通して、そして説教を通して語りかけ、聖霊を注ぎかけ、さらに「**これはあなた方のために裂かれたわたしの体である**」「**これはあなた方のために流されたわたしの血である**」と言って、ご自身の愛を、その命を与えようとして下さっている。

このことを具体的な徴を通して知ることが出来るのは、教会において主日礼拝をささげ、特に聖餐にあずかるキリスト者たちである。

57 節に、「**父がわたしをお遣わしになった**」とある。この言葉は、この後、20 章において、復活の主イエスが弟子たちの前に現れてくださった時にもう一度語れている。

**「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」**

父なる神と独り子なる主イエスの関係が、そのまま主イエスと弟子たち(キリスト者)の関係に移される。そして、6 章では「**わたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる**」と言われているが、この言葉の具体的な意味も 20 章で明らかになる。弟子たちを遣わすと語りかけられた後、主イエスは弟子たちに「**息を吹きかけて**」こう言われた。「**聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。**」

聖霊が注がれる礼拝において、主イエスの聖餐に与かって生きるとは、主イエスを食べて、主イエスによって生きるということ。

この「**よって**」は、「**ために**」とも訳せる言葉（ $\delta\iota\alpha$ 、ディア）で、そちらを採ると、主イエスを食べることで生き、主イエスのために生きていくキリスト者とは、自分が赦されたように赦しに生きる以外にはないということになる。主イエスによって生きるも、主イエスのために生きるも、その内容は与えられた愛、与えられた赦し、与えられた命を、人に与えるために生きるということ。そのキリスト者の人生の土台になるのが聖餐である。

56 節の「**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる**」という言葉は、直訳すれば「**私の中に留まっている**」。

【NKJV】 "He who eats My flesh and drinks My blood abides in Me, and I in him.

【TEV】 Those who eat my flesh and drink my blood live in me, and I live in them.

15 章に出てくる有名な言葉、「**わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。わたしに繋がっていなさい。わたしもあなたがたに繋がっている**」とギリシャ語では全く同じ（ $\mu\acute{\epsilon}\nu\omega$ 、メノー、「**留まっている**」「**繋がっている**」）である。この  $\mu\acute{\epsilon}\nu\omega$ 、（メノー）は内面的なことに留まらず、キリストの体なる教会、聖霊の宮なる教会に繋がり、この交わりの内に留まり、命の言葉、命の息吹なる聖霊、そして命の糧である聖餐を頂きな

がら生きるということ、つまり教会生活を続けるということである。そのことの中でこそ、主に赦されるのだし、主による赦しに向かって生きることが出来る。

59 節. 「これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。」

これまでの話を冷静に見れば、主イエスをカファルナウムまで追い求めてきたのは、当初は男だけで 5000 人という大群衆であった。だとすれば、それは会堂などという小さな建物に入れるはずはない。でも、いつしか主イエスと話しているのは「ユダヤ人」ということになっていたし、60 節を見ると、何の説明もなく「弟子たち」になっていく。いつの間にか、私たちも含めてのキリスト者の問題になっている。そして、場所も湖周辺の広場から、湖岸の町カファルナウムになり、最後はその町の「会堂」、つまり礼拝堂の中になっている。ある写本は、「安息日の会堂」となっているらしい。つまり、主日ことの礼拝の中で主イエスが語っているという設定になっている。